日本山海名物圖會

一

陸奥守従五位上百濟王敬福カ郡内少田郡ニ黄金在ト奏氏獻此遠聞食驚伎悦波世給布・

大伴宿禰家持

皇れ御代さかんと東なるみちのく山ゟ
こかね花咲　金寶之盡さ于姫氏國神邦

聖帝之民を沛に徳十千世を頂き於ち阿
らし民侶之營界に曲於者又好而樂而
眈於旨眈てなるほと云事なし既に成然
日本山海名物圖繪と號る這之平瀨氏徹齋翁
日々に編て夜々に緝むおもへ古人古人之一癖
を愛せ於ゝおもし強て予之手を執て
是をとていひ然に於何ぞ手にれと毋孝子先考

之心を繼て両意を毅せ借閲し字
たとしへなし風月之道清に流れ行として
半也又愚に雙林一僧茗種之妙を陸氏を
欺き宴弗暮て禪指空し貞徳句を幸に記之
千世萬代にうつん桃の花を愛す且天平二十一年
二月丁巳東方異邦ノ官人不賑福達一機眷
惠、無欲手有余載扶桑時令治々世々不啻

知恥者且暮遇之
一箇事辭ス小且何ゾ主人只恁ゑ小に
心裏おろく蒲柳髻くゝ撓て

八十一叟半時庵

旹寶暦四年季夏一旬

撰

跋

誹人拵六ヶ白末社代よりして和歌の道に
對するものハ金銀なとも困りまゝ愚鬼神也
なりしめたとき残人なれ中を守りけたけき
ものゝふれ心をなくさむるものハ是なりと讀に
是よりにくまるゝ者ハ此畧て一日此道萬も成

かくし其金銀銅鉄の出所其外諸国
山海の名産世人のいまだしらざる所く
先考平瀬徹斎子孫にしらしめんため
緝集し絵師長谷川光信に画図を
加て五巻となし世に雷をなしの力士
たて連鼓を携へ右に鞭をとりて多くは豹虎の
皮を特鼻褌に用ゆとや王充が説に出
僧正坊は縁は古法眼の夢想に思ひよるよ
山僧を見しより始りしとて絵空言とかく
信せし然事多し今此図せる所は山海
名物はさまあれ法は山川海濱の物産に
世をはなれたるを第一として價を施して

得る所は現在の国なりと謂とするに足れ
りとせんや具識が其産を知つハ彼の利ある
賤業を為る者の為とせん此書世の為に少
益ありといへども猶こそにまれなれば追てまた
聞しく物産の大成を期するのみ

赤松閣平瀬徹斎書

日本山海名物圖繪目録

巻之一

金山鋪口の圖

金山の鋪口を鋪口とも又ハ真府ともいふ吉日を撰び神をまつりて善悪を考へほりかゝる也凡人を
下役して凡金銀銅鉄皆して金山といふ我朝の金のはじめハ
人王四十六代孝謙天皇天平勝宝年中はじめて陸奥の国より献ず
る也白銀ハ人王四十代天武天皇の御時はじめて対馬の国より出る
出る也銅鉄ハ神代より出ると云伝へたり

金山鋪口の図

金山の鋪口を鋪口とも又ハ真府とも云。吉日を選び神まつりをして普請手よりかゝる。くらき穴のうちなれば人を下從といふ。凡金銀銅鉄鉛して金山といふ。我朝に金の出る事ハ人皇四十六代孝謙天皇天平勝宝年中にはじめて陸奥の国より献り出る也。銀ハ人皇四十代天武天皇の御時はじめて対馬の国より出る。銅鉄ハ神代より是ありと云伝へたり

銅山諸色請方の圖

山口より穀をはじめ金銀米味噌醤油塩炭薪其外
沙金銀一さい万事方の入用物をそへて金山のさかへ
る人手錢拂しをりきと東国まてハ方より売買し西国まてハ諸國
いふ銅山で物の入用物付ちよりワうと賣買これよりして諸商人あまたく
入来りてその家さへ市のごとし然るに其事子ハ商人より
ぜにのふりをくげしりてそのいとなみをも兼ねるなり

光信畫

元方へ錫を見斗ゆくてい

光信畫

銅山鍛冶

鋪の中にて用る道具あまたあり皆山にてこしらゆるなり
故に鍛冶屋をたてゝその職人をかゝへおきて是をこしら
ゆるのみならずそこねやぶれたるをなをしつくらふなり道具其外
吹は絵略あり又合せ見べし〇山の役人あまたあり

鋪役人　庄家　手子　山留役人　鑪掛　銅掛　鍛冶

釜大工　素吹大工　間吹大工

金山鋪口

金銀銅鉄ハ所によりて仕上ハてらしづのちがいあり 金山ハ入ル口を鋪口としハ穴の四方を柱をたてゝ上と左右の三方に乱様を入る也 此乱様を矢といふ 三方ともに矢の数八十六ならべる 上の矢のうへにつぎ木をさしおき本といふ 此鋪口を見とおしに左右の方に風呂口をあけたり あれハいきぬきなり 是より鋪の中にまはりをかこひ又大切口ハ水ぬきなり 役木小屋番子此小屋ハ鋪の前にあり

金山鋪の中の図

鋪口より段々ちかく入上しき方とにハ諸鋪口の狭しとく矢をいれて大石のくづれぬやうにする也下段ハ留あきまをつゝみ縄にて堀道をつけさゞいがらに油を入燈とそくまた火をともして掛渡し吹子にてあふりをいれてくらくとして風呂し口あれハ胸へとゞかりごとし又ありく時ハ樋にて水を引上げ鋪口へおとし是を金穴ちかく泊るとたるなかり是をおひおとし之和同とて大金を不ハがんのくちにてれいたなり

鉑石くだく図

山よりほりおろしたる鉑石をもちおろしてくだく
これをかなめといふ板にその槌をうちあつる也くだく
鉑をくだくは世の諺なり鉑を入て精選うつしおもてうらと
いふなどの字はいまだ詳ならず又たくも鉑の字正字にあらず鉑は
金銀銅鉄のたくなり字彙にいはく鉑古猛切音礦金銀
璞也とあれバ此字ハ鉑なるべし

銀山淘汰の絵

銀山の鉑石上の絵にあらハすごとく打くだきて粉とおろして水にてゆる事金山の板取りのごとし　総銅ハ水中にとゞまりてとかく直に焼釜にてやく事淘汰の仕やうハ寸切桶に水を汲入りいれ鉑を箕にいれ水にて曳れハ土石ハ落す切桶の水におちて鉑ハ箕の中にのこるなりたいていハ金山の板取りのごとくほどこすなり

山神祭

山の神ハ山口に杜をえらびて社を飾付も神ハおのくれ祝ひ
によりて宮りとことふしやうをいひハ京大坂より芸流の名士
まじく是れを近ひとらだやうにいらひやうつることおりそ近の者く諸くより
参詣の男女らん〳〵せまれども扨う見徒あきんどく多く参りつどひてにぎは
ちひ諸社の大神多かよことを事へも神多よて多く参らす神をもまつらふ
とるものすゆふれども おほく参りてみだやらなり祭ハ九月九のあり

釜家(かまや)の繪略

銅山よりほりだしたる鉑(あらがね)を此家にて焼釜に入れやくこと○あらゆる手にて八銅を以て宝とし其うち漢書に云ふ律暦志に云く凡律度量衡に銅を用る者ハ物の至精にして燥湿寒暑の為に節を変ぜず風雨の為に形をあらためずとあり是によりて唐和共に交易に用ふなどにすとしとつくれり

銅山床家（とこや）

釜家にて焼たる鉑を湯にわかして丸銅に仕あぐる所を床家といふ也銅を湯にわかす時銅ハ下へ吹いでたるをつぼとりといひ又そこにたまりたるハからみをとこまへと云て二番ありて又石の湯となりたるをからみといふ又どぶといふもの有て鉑をひやし固るをどぶかしといふなり

たゝら炭

ねこえぐち

まへでこ引人

吹大工

二挺ふいご

どぶゞ

銅をひやす所

鉛（なまり）

説文にいはく鉛ハ青金なり錫の類といふ管子にいはく山上に鉛あれバその下に銀あり山上に銀あれバその下に丹ありといへり丹ハ丹砂とてすなはち朱砂のことく今俗の異に用ゆる丹ハ別に鉛を焼てこしらゆるなり又胡粉も鉛をやきて製するなり各製法ありて別書にありとも○鉛ハ山よりほり出し湯にわかして流せバ竿に鋳て其形ちどろく入屋に錫をつけてもよいはうもあれば錫をあつかふ也

真鍮大工の図

真鍮といふハ銅より白め薬をぬきとりて赤味なくうすく仕あげてうつしを銅に色ぐくふいごハ二挺ふいごになり鍮かねやくしやうあるハ吹きのてしかたなるべし

古今集大歌所の御歌

まがねふく吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ

吉備の中山ハ備中に今も備中より多く鉄を出せり

たゝら屋　ふいごハ跡のうしろにあり

金山淘汰金
猫田流し
板ゆり

南京鞴
なんきんふいごハたゝらのつけそぐちよりして二てうふいごにて
ふく也銅より白目をしぼり又は用ゆる又銅より銀を
しぼり取るにもこれを用ゆる〇金山の下銀辛苦して室をあり
ありしての世けなり唯おの手がらをまたよのくらべ分の利ハ皆金山司乃
徳用とかれも唐の羅隠が詩ニ採得百花成蜜後不知辛苦為誰
甜と云る蜂の身のうへと同しかんへし
二てうふいご
たゝらかべ
つけそぐち

鉄山の絵

鉄ハ鑛おーしゟ去なからにふみおとして鉄をとれるなり
あさき流川にひしろを置てそのうへにおりかゝりたる土砂を
ながしされバ鉄ハ山しろの下にとゞまり土ハ皆ながれ行なり○石見備中
備後の三ヶ国おゝく鉄あり備中に出る金ぐそといふ鉄あり古人ハ
出来のものなり延喜天皇の御時まで備中よりおさむるを撰にあると
又ふりかねハ金銀銅鉄の惣名にて鉄ハ黒金なり

鉄蹈鞴（てつのたゝら）
銕をふくにハふいごにてハ湯になりがたし故にたゝらにかけて湯にわかすなり
斎

銅山ふき分の方　ふきあげたる金をこれより紙にて荷おとし京大坂
等へおくる也銅鉄皆同じ○鋼鉄ハ銑をよくきたひ
うちて五車韻瑞ニ鋼ハ堅鉄なりとあり刀剣をつくる中へ入り
刃金といふ
むしろ包錬る所